東京大学大学院総合文化研究科　グローバル地域研究機構付属中東地域研究センター
［スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座］

UTCMES ニューズレター

VOL.6　2015

1. 第３回スルタン・カブース学術講座シンポジウムの開催　1
2. シンポジウム開催報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（1）「悪としての世界史　三木亘の中東文化論」
（2）「資源・開発・政治　中東とその周辺地域の視座」
3. セミナー開催報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
（1）The Royal Ideology of the Medieval Georgian Bagratids
（2）IHSセミナー「非西洋諸国の法制度及び『法』に関する現象をどのように研究するか？：マレーシアのイスラーム法を素材として」
（3）The Assyrian Genocide of 1914-18 (Seyfo): Letters from Assyrian Eyewitnesses
4. 駒場博物館におけるオマーン展「Omani Corner at Komaba」開設について ・・・・ 8
5. 刊行物の紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
（1）イスラーム世界のジェンダー秩序
（2）中東の思想と社会を読み解く
6. センターの活動から ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
（1）「スルタン・カブース・ローズ」の植樹
（2）カタル大学総合文化学部長一行の東京大学教養学部来訪
7. スタッフ・発行者情報 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

1. 第３回スルタン・カブース学術講座シンポジウム「持続的発展に向けた水資源の管理」

東京大学大学院総合文化研究科　中東地域研究センター兼務准教授
高橋英海

2014年10月2日と3日の両日にわたり、本郷キャンパス伊藤国際学術センターにて、第三回スルタン・カブース学術講座シンポジウム「持続的発展に向けた水資源の管理」が開催された。

2011年4月に、総合文化研究科にスルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座が設置されてから間もなく4年となる。オマーン国からの寄付による学術講座は、世界の13の大学に、人文科学から応用化学に至る様々な学問分野を対象とした15の講座がある。これらの講座の担当者が一堂に会するシンポジウムは、2010年にオマーン国の首都マスカットで開催された初回、2012年に英国ケンブリッジで行われた第二回に続き、今回が第三回となる。

シンポジウムは世界中のスルタン・カブース学術講座を管轄するオマーン国スルタン・カブース高等文化・科学センターと東京大学が主催するかたちで行われ、開催に当たってはオマーン、日本両国の外務省をはじめ、駐日オマーン大使館や日本・オマーン協会などの協力をいただいた。

シンポジウムの開会式には皇太子殿下ならびにオマーン国遺産文化大臣ハイサム・ビン・ターリク・アール・サイード殿下の臨席を賜り、濱田純一総長の開会挨拶に続いて、両殿下からのお言葉を頂戴した。

開会式に続く初日の第一セッションでは「総合的水管理」がテーマとして取り上げられ、オマーン国地方自治・水資源省のアブー・アリー次官による基調講演「オマーンにおける水資源戦略」に、本学生産技術研究所の沖大幹教授による「変化する世界と総合的水管理」、ユトレヒト大学のルート・スホッティンク教授による「真の挑戦としての汚染された土壌と地下水の管理」についての講演が続いた。

「水資源と社会・文化的多様性」とする第二セッションでは、スルタン・カブース大学副学長補佐のモーナー・ファハド・アール・サイード妃殿下を座長、本研究科の遠藤泰生教授を報告担当者として、山内昌之本学名誉教授による基調講演「日本の水と自然―スルタンに初めて接見した日本人が観察したオマーン：志賀重昂とタイムール国王」に続いて、ニズワ大学（オマーン）のアブドゥッラー・ガフリー教授による「オマーン・アフラージュから学ぶ水管理の伝統的な知」、アラビア湾大学（バハレーン）のアフマド・サーリフ教授による「伝統的な水管理」についての講演が行われた。

シンポジウムの二日目には、それぞれ「アラビア語とアラブ文学研究」、「水と信仰」、「中東における社会変容」をテーマとする三つのセッションで、計11の多様な講演が行われ、本学からはカブース講座担当者の辻上奈美江特任准教授と高橋が講演者として、東洋文化研究所の長澤榮治教授がセッションの座長として参加した。

（シンポジウム2日目の様子）

シンポジウムの開催中は、講演会場の隣でオマーンの文化を紹介する展示が行われ、普段あまり触れることのできないオマーンの文化について学ぶ機会を得た。同時に、水資源管理についての国内外の学生によるポスターコンテストも行われた。コンテストの最優秀賞は、残念ながら、東京大学の学生ではなく、オマーンの学生に取られてしまった。

シンポジウムには、オマーンからの来客の他に、アラブ諸国の駐日大使も出席した。大使たちの車の乗り降りで、本郷通りでちょっとした渋滞を引き起こしてしまったとも聞くが、アラブ諸国の関係者に東京大学の存在を認識していただくよい機会になったものと思う。国内からも多くの研究者や学生に参加していただいた。学内外からの参加者には、現在の世界における重要課題の一つである水資源問題について考えると同時に、オマーンをはじめとするアラブ諸国についての認識を深めていただく機会を提供できたものと考える。

二年前、ケンブリッジでのシンポジウムで東京大学が次回の開催地に指名されたときには、今回のシンポジウムがそれなりに大掛りなものになることは覚悟したが、実際にこれほどの大規模なイベントとなるとは思っていなかった。また今回のシンポジウムは、教員・職員の協働による東京大学の組織力と底力を改めて認識させられる機会となり、本当に言葉に表せないほどお世話になった。この場を借りて厚く御礼を申し上げる。

（オマーンの文化を紹介するスペースの様子）

2. シンポジウム開催報告

（1）「悪としての世界史　三木亘の中東文化論」

2014年4月20日日曜日、東京大学駒場キャンパスの21KOMCEE地下1階レクチャーホールにて、UTCMES公開シンポジウム「悪としての世界史　三木亘の中東文化論」を開催しました。本シンポジウムは、我が国における西アジア史および中東地域の研究を長く牽引してきた、三木亘・慶応義塾大学特選塾員の研究成果とその意義を、本人を交えたシンポジウムの形で回顧するとともに、今後の中東地域および世界史の研究方法について展望することを目的として企画されました。

（三木亘・慶應義塾大学特選塾員）

プログラムは二部から構成され、第一部のはじめでは、詩人で三木氏の教え子でもある、新井高子・埼玉大学准教授が、「声の史学に耳傾けて—『悪としての世界史』刊行の道行きとともに」という題目のもと、2013年に刊行された『三木亘著作選　悪としての世界史』の内容と構成、刊行までの経過を紹介しました。続いて新井氏は、「三木亘」に滔々と流れるもの、センスの観点から」と題し、三木氏のこれまでの著述活動を、「歴史＝批評」「ことばのたくらみ——歴史叙述」「パラダイムチェンジへの欲望」「理系的センス——ダイナミックな抽象化、歴史生態学の構築：鳥の目」「等身大へのまなざし」などのキーワードから解説しました。

続く「私の世界史論、中東地域論」では、杉田英明・本学中東地域研究センター長と新井氏が案内役となり、三木氏が自身の世界史論・中東地域論の形成過程を、「前史：軍事教練の体験」「世界史像・世界史認識への関心：1950年代～」「中東イスラム世界への注目：1950年代後半～1960年代」「「人間移動の文化」論：1970–1980年代」「世界史のなかの中東イスラム世界：1980年代以降」から説明しました。三木氏は、1950年代の高校社会科「世界史」の誕生による現場の教員たちの熱い議論を紹介するとともに、自らが提唱した「人間移動の文化」論はイスラム世界の人びととのつきあいの経験から生まれた発想であること、1980年代以降「近代ヨーロッパ」を「イスラム世界の形成」史の文脈で捉えること、また西アジア・北アフリカ・ヨーロッパを一括して「西洋」と名づけ，単一の文明展開の場と見ることを提案してきた経緯を説明しました。

第二部では、「三木史学をめぐって」と題し、三木史学の受容と展開について、2名の研究者が登壇しました。家島彦一・東京外国語大学名誉教授は「人間移動文化論を中心に」と題し、自身の研究テーマであるインド洋を中心とする海域世界論、およびイブン・バトゥータをはじめとするイスラム教徒の旅行家の研究が、モノのレベルでのイスラームの生活文化研究を世界史に組み立てるというフィールドからの発想、一国史のようなミクロを扱うが、それ以上に広域な全体像を捉え

ようとする地域横断的な研究、そして世界史におけるイスラム社会の相互的理解という立場から進められてきたことを、ダウ船の交流圏をその例として交えつつ論じました。また羽田正・本学東洋文化研究所教授は、「三木史学をめぐって　新しい世界史との関係を中心に」と題し、三木史学を「瑞々しく鋭い感覚」と評価し、その方法論は現在においてもなお一定の有効性を有しているとしつつ、この三木史学に続き、現在の世界情勢に合致するものとして①地球全体を視野に入れる、②中心性を排し、共通性・関連性を重視する、③縦の時間軸ではなく、横の空間軸に沿って説明を展開する、④日本語での議論と研究報告にとどまらない、地球市民という主体による歴史叙述を核とする、「新しい世界史」を構築することの重要性を論じました。そして最後に二つの発表への応答として、三木氏がコメントをしました。

会場には100人を越える聴衆が、西アジア史および中東地域の研究を長く牽引してきた登壇者たちの話に耳を傾けていました。

（近藤洋平）

（2）「資源・開発・政治　中東とその周辺地域の視座」

2014年7月5日土曜日、東京大学駒場キャンパスのアドミニストレーション3階学際交流ホールにて、UTCMES公開シンポジウム「資源・開発・政治　中東とその周辺地域の視座」を開催しました。「アラブの春」から月日が経ち、中東地域の政治は国際政治や地域情勢に大きく揺さぶられ、その背後では資源をめぐるポリティクスが見え隠れしています。中東で起きている政治変動を、資源そして開発の観点からはどのように理解できるのか、本シンポジウムは、この問題について議論を深めることを目的として企画されました。

最初の登壇者である小林良和・日本エネルギー経済研究所化石エネルギー・電力ユニット石油グループマネージャーは、「国際石油天然ガス市場と中東地域」という題目のもと、中東は石油の生産量・埋蔵量に関しては、他地域を圧倒していること、一方天然ガスについては、埋蔵量の規模に対し生産量が低水準であることに触れました。そして2030年までの世界の石油需要増加のうち、ほぼ半分が中東からの増産によって賄われる見通しであること、また天然ガスでは、寄与度が相対的に低いものの、旧ソ連、アジアに次ぐ増産の見込みであることなどを明らかにしました。そして今後の展望として、シェール革命がもたらす中東諸国への物理的な需給面での影響は今のところ限定的だが、シェール革命が米国の対中東政策の「口実」に用いられる可能性があることなどを論じました。

続く土屋一樹・アジア経済研究所地域研究センター研究員は、「エジプトのエネルギー問題：スィースィー新政権における財政と開発への影響」と

題し、エジプトにおける原油・天然ガスの産出量と消費量、またエジプト経済における石油・ガス部門の位置の現状を報告しました。そしてエジプトではエネルギー収支が2011/2012年度から赤字になっていること、政府が石油公社に支出するエネルギー補助金が国家予算の二割に達していること、さらに湾岸産油国やリビア、イラクからの支援を受け、国内エネルギー不足の解消を図ってきたことを明らかにしました。そして国内の安定のために、スィースィー政権は、エネルギー補助金の削減を通じて財政赤字の削減を図ること、一方安定的なエネルギー供給のために石油輸入量を増加させること、石炭・原子力・再生可能エネルギーを混成して、国内でのエネルギー開発を進めていくことなどが求められていると論じました。

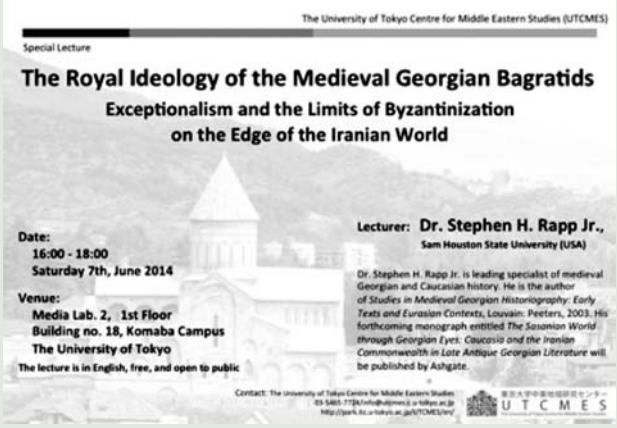
休憩をはさみ、高橋基樹・神戸大学国際協力研究科教授が「資源の呪いを超えて～世界経済の構造転換と西インド洋圏開発の課題」として、インド洋は人類の過去と未来、豊饒と貧困、紛争と平和、抑圧と抵抗が交錯する海であること、2060年にはアフリカの人口は世界最多に、世界の人口の半分以上は環インド洋に住むようになることを紹介しました。そしてアフリカの歴史的経緯に触れた後、現代におけるアフリカ地域の特徴として、資源収入や外国援助を得た現代のアフリカ諸国家は、アラブのレンティア国家と同じように、支配の一手段として分配をしようとするが、国家の歴史の浅さのために、行政がぜい弱で、分配を徹底できず、結果として貧困は広く放置され、不平等が拡大してしまうこと、これは社会不安・支配の危機をもたらすものであるが、人口の増加がそれらをさらに深刻化させるものとなることを挙げました。そして西インド洋圏の課題として、国家の脆弱性を克服すること、優れた教育の提供の必要性などを上げました。

そして最後の登壇者である猪口相・経済産業省資源エネルギー庁省エネルギー新エネルギー部政策課国際室課長補佐は、「中東における省エネルギー導入計画の現状と課題」という題目のもと、中東産油国が、人口増加と産業多角化の進展、それに伴う電力とガソリン消費の増加により、将来的に石油輸出が困難になることを問題視していること、各国で省エネルギー法や省エネの日の制定、また各種キャンペーンを実施することを通じて、国民に省エネに関心を払うよう呼びかけていることを紹介しました。そして中東の省エネ政策には、日本の経験が大いに役立ち、ビジネスチャンスとなりうるものの、格安なエネルギー料金、国民の意識、そして環境の違いが課題として立ちはだかっていると論じました。

会場には70人を超える参加者が、資源・開発・政治をめぐる中東北アフリカの現状について、熱心に耳を傾けていました。

（近藤洋平）

3. セミナー開催報告



（1）特別講演会

「The Royal Ideology of the Medieval Georgian Bagratids: Exceptionalism and the Limits of Byzantinization on the Edge of the Iranian World」実施報告

日　時：2014年6月7日（土）16:00-18:00

報告者：Dr. Stephen H. Rapp Jr. (Sam Houston State University (USA))

会　場：駒場キャンパス18号館1階メディアラボ2

東京大学大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻　博士課程
居阪僚子

アメリカよりラップ博士を招いて、「中世グルジア・バグラティオニ朝の王権概念：イラン世界の辺境における例外性とビザンツ化の限界」というテーマで講演が行われた。バグラティオニ朝は、9世紀に成立して以後、19世紀にロシアへ併合されるまでグルジア（現地語では「サカルトヴェロ（カルトリ人の国）と呼ばれる）を支配した。その長い歴史の中で、11世紀13世紀までの最盛期には、東西グルジアを統一し、アルメニアやコーカサス・アルバニアをも併合して北イランから東アナトリアまで大きな影響を及ぼした。本講演では、バグラティオニ朝の成立期から最盛期にかけての王権に関する史料を通して、この王権の性質についての検討が行われた。

最初に検討されたのはグルジア教会と近隣諸勢力との関係であった。

グルジア人（ラップ博士は時代も考慮して「カルトリ」の語を用いていたが、本報告書においては便宜上「グルジア」へと置き換える）は4世紀のミリアンの時代にキリスト教へと改宗した。この改宗の動きにおけるビザンツ帝国の影響については議論があるが、当時のグルジア教会がコンスタンティノープルを中心と見なしていなかったことは指摘できる。また、グルジアの教会建築は一般にビザンツのものに類似しているが、初期の様式は異なっており、一部にアルメニアからの影響が見られる。初期のグルジア教会がコンスタンティノープルと距離を置いていたことは、カルケドン公会議の決議を承認しなかったことからも分かる。その後7世紀に入ってこの決議を承認しており、この時期にアルメニアから離れてビザンツ側へと接近した可能性がある。さらに、8世紀にアラブの進出を受けてグルジアの中心がタオ・クラルジェティ地方（現在のトルコ共和国領東北部）へと移転したことで、地理的にもビザンツ帝国と距離が近づくこととなった。この時代には東地中海各地にグルジアの修道院が建設された。聖山アトスにおいてもグルジア聖職者の活動が盛んになり、イビロン修道院において様々な書物がギリシア語からグルジア語へと翻訳された。ここでは、当初は南方（アルメニアからさらにシリア・パレスチナ）を見ていたグルジア教会が、やがて西方（コンスタンティノープル）の顔色を伺うようになったという流れが見られる。さらに、グルジア教会はコンスタンティノープルと関係が深まると同時に独立教会であることを主張した。こうした傾向は教会関係だけでなく、バグラティオニ家の王権維持政策においても観察される。彼らは、ビザンツ帝国へと接近しながらも独立を維持するよう立ち回ったのである。

この傾向は、バグラティオニ朝の前にグルジアを統治したグアラム朝の公たちにもあり、彼らはビザンツ皇帝からクロパラテスの称号を受け取っていた。その一方で、彼らは支配権を象徴する際にイラン（ササン朝）と同じ儀礼を用いていた。これはキリスト教へ改宗した後も同様で、グルジアにおいては両要素が混在していたのである。バグラティオニ朝の王たちもこの伝統に従っていたが、10世紀後半になって旧来の伝統から距離をとるようになった。

11世紀初頭、バグラト3世王のもとでグルジアの統一が達成された後、王族のスムバトはグルジア人の歴史について新しい伝統を創造した。スムバト以前には、グルジア人の起源をパレスチナから移住したユダヤ人の一支族とするのが一般的であり、この歴史観はアルメニア人史家モウセス・ホレナツィによるものと考えられる（ただし、グルジアの史家たちが直接ホレナツィの書物を読んだ可能性は低い）。それに対して、スムバトはグルジアのバグラティオニ家が聖書に登場する王ダビデの子孫であるという伝承を作り出した。これはエウセビオスが成立させたビザンツ皇帝の系譜に対抗しうるプロパガンダであったと見られている。

その後、11世紀から13世紀（モンゴルの侵入以前）にかけて、『カルトリス・ツホヴレバ』と総称される一連の年代記群（Kartlis Tsxovreba、直訳すれば『グルジアの生活』）が成立した。この豊かな歴史書群はバグラティオニ朝のために著されたもので、統一を果たしたダヴィト王や最盛期のタマラ女王などに多くの記述が割かれている。これに含まれるもののうち、『諸王伝』（先キリスト教時代の諸王の列伝）、『ヴァフタング・ゴルガサリ伝』（5-6世紀の賢公）及び書名の伝わっていない一作品は800年前後に成立したと考えられている。この時代はすなわちバグラティオニ朝の黎明期であり、これらの作品には彼らの初期の王権概念が現れている。例えば『ヴァフタング・ゴルガサリ伝』にはイラン的な君主の伝統が現れており、さらにヴァフタング王自身はキリスト教の王であるにも関わらずゾロアスター教の要素を含んでいる。またこの史料の中でヴァフタング王は聖書に登場する王ニムロドに比される。この巨人は神の意志に背く存在であるが、中東世界では「世界初の王」としてポジティブなイメージを与えられることが多い。イラン人やアルメニア人は自身をニムロド王の系譜に結びつけたのである。ヴァフタング王とニムロド王を結びつける表現は、すでに述べた、スムバトによるダビデ王とバグラティオニ家を結びつける主張と対照をなしている。ニムロド王もダビデ王もどちらも旧約聖書の登場人物ではあるが、その位置づけは全く異なっているからである。

ダヴィト建設王やタマラ女王を賞讃する際には、旧約聖書のダビデ王とのつながりを主張するだけでなく、ビザンツ皇帝と比較することも行われた。またこの時代にはビザンツ帝国での高位の称号を用いるようになる。例えば、ダヴィト王

は最終的に「バシレイオス」という皇帝を意味する称号を用いるようになるのである。同時期の洞窟修道院の壁にはビザンツ様式の服装をした王の肖像が描かれている。すでに述べたようにこの時期コンスタンティノープルに接近していたグルジア教会においても、称号の変化が観察できる。グルジア教会の首長は5世紀以降はカトリコスという称号を用いていたが、11世紀にはギリシア語で総主教を意味するパトリアルケスを名乗るようになった。そして、正教会世界で第6番目の総主教座となったのである。

以上のように、ラップ博士の講演では、中世グルジアのバグラティオニ朝においては当初イラン的な伝統にしたがって王権概念を形成していたが、11世紀にグルジア統一を果たした時期からビザンツ的な概念が持ち込まれるようになった過程が語られた。これに対して、フロアからは前キリスト教時代のグルジアの伝統の影響は見られるのか？という問いがあった。これに対して、アルメニア人の始祖とされるハイク（Hayk）とともにニムロドと戦ったカルトロス（Kartlos）という伝説上の英雄の存在が挙げられた。ここには聖書とそれ以前の伝統の融合が見られるが、グルジア独自のものというよりはアルメニアの影響が濃いものとなっている。この他にも多くの質疑が行われ（字数の都合上省略せざるをえず残念である）、非常に盛況な講演会となった。

（2）IHS セミナー「非西洋諸国の法制度及び『法』に関する現象をどのように研究するか？：マレーシアのイスラーム法を素材として」実施報告

東京大学大学院総合文化研究科
国際社会科学専攻国際関係論コース
多文化共生・統合人間学プログラム(IHS)
修士課程1年 浅井　悠

2014年11月7日水曜日、UTCMESは東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラムである多文化共生・統合人間学プログラム（HIS）と共同で、福山市立大学の桑原尚子准教授による講演会「非西洋諸国の法制度及び『法』に関する現象をどのように研究するか？：マレーシアのイスラーム法を素材として」を開催しました。

桑原准教授は前半において、1,非西洋諸国の法制度における共通性の有無、2,いかなるレベルあるいは視角から「法」を研究対象とするのか、3,外国法を研究する際に留意すべき点及び4,法学から研究課題に対してどのようにアプローチするのか、という題目で方法論に関して講演しました。

第一の点については、途上国に対して西欧近代法の移植が行われたこと、「紙の上の法（law on books）」と「生ける法（law in action）」の間の齟齬が大きい傾向があること及び国家法制度の機能不全が散見されるという共通性を指摘しました。第二の点については、法秩序を法規、裁判規範及び生ける法に階層化するエールリッヒの理論と、これに着想を得て、法システムを規範としての法及び制度としての法という公式法体制と文化としての法という非公式法の三層に階層化する安田信之氏の「法システムの三層構造」と、非西欧諸国における公式法体制は植民地化や近代化の過程において西欧諸国から導入されたものを基礎として形成されたのであり、固有の文化や伝統のなかから内発的に生み出されたものではなく、公式法と非公式法の統合を目指す努力が必ずしも成功しておらず、非西欧世界の法の全体構造を理解する上では文化としての法という独自の法概念の設定が必要であるという安田氏の問題意識のほか、人々の行動を制約するルールの総体としての制度を重要視する制度論も紹介しました。また、第三の点については、同じ法律用語を用いていても異なる機能を果たしている場合があること、日本法という「色眼鏡」を通して外国法を認識しているという自覚を持つことを指摘しました。第4の点については、法学における実定法学と基礎法学という2つの大きな区分のうち基礎法学に属するアプローチとして、比較法学、法社会学、法人類学、開発法学を紹介しました。また、非西洋諸国の重層的な法体系を把握するための分析枠組として、宗主国法制度の移植を受けた旧植民地国、大陸法を移植したタイのような植民地経験のない国及び市場経済化や民主化のための法制度が移植された体制移行国という重層的な法体系の沿革、世界の法秩序を法圏として分ける比較法学における法圏論、一つの「社会領域」において複数の法秩序によって行為が規制されている状況を指す多元的法体制、植民地化以前の原国家における固有法、植民地国家における移入法及び開発国家における開発法として重層的に捉える安田氏の見解や、千葉正士氏によるアイデンティティ法原理を紹介しました。また、法学の研究における法令や判例、インタビュー等の一次資料と、学術論文や著作物といった二次資料といった資料の区分、研究の足場としての法学内部における諸領域、我が国における法学領域の学会や、先行研究の調べ方についても説明しました。

（3）特別講演会：The Assyrian Genocide of 1914-18 (Seyfo): Letters from Assyrian Eyewitnesses

2014年12月6日、UTCMESは独ゲッティンゲン大学神学部のマルティン・タムケ教授（Prof. Dr. Dr. Martin Tamcke, Faculty of Theology, The University of Göttingen, Germany）を講師とする特別講演会The Assyrian Genocide of 1914-18 (Seyfo): Letters from Assyrian Eyewitnesses（1914～1918年のアッシリア人虐殺（トルコ、イラン）：目撃者の書簡から）を開催しました。

4. 駒場博物館におけるオマーン展「Omani Corner at Komaba」開設について

2014年9月に、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属の駒場博物館1階ロビー内に、オマーン展「Omani Corner at Komaba」が設置されました。本展示は、スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座の開設を記念するとともに、東京大学の学生・教職員にはもちろんのこと、多くの方々に、オマーンをはじめとする中東地域の生活や文化をわかりやすく紹介することを目的として設置されました。展示されている資料は、主としてオマーン国政府から提供されたものです。本コーナーは常設展として設置され、特定のテーマのもと、1年に数度、展示替えをすることで、オマーンについて、そして中東地域について多角的に解説することを計画しています。

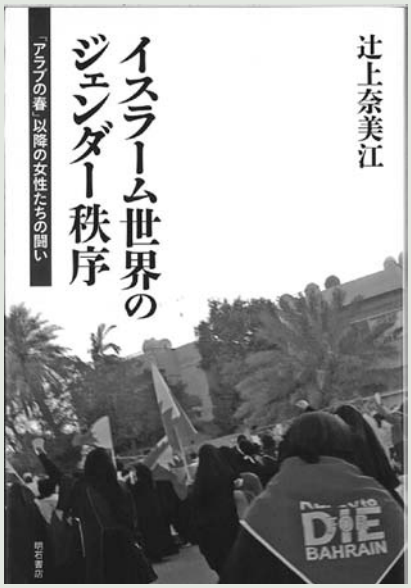
2014年度下半期は、「オマーンの民俗と人びとの暮らし」をテーマとして、オマーンの風景を写したパネルとともに、オマーン人が着用する衣装、また現在でもオマーンの人びとによって用いられている、銀製品や土器、そしてナツメヤシを利用した各種工芸品を展示しました。

開館時間は10:00から18:00で、入場は無料です。皆様のご来場をお待ちしています。

5. 新刊紹介

（1）

辻上奈美江『イスラーム世界のジェンダー秩序：「アラブの春」以降の女性たちの闘い』東京：明石書店、2014年、194頁（ISBN978-4-7503-4067-8）、2500円＋税



「アラブの春」における女性たちの戦略

「アラブの春」は当初、権威政権に抗する民衆による民主化の可能性が期待された。だが民主化に向けて進み始めた国は極めて限定的で、実際には多くの国では逆に権威主義の復活や過激派の活発化、ひいては治安の悪化を招いている。

ジェンダーの視点から捉え直すと、「アラブの春」をきっかけに、女性がデモに参加するいわゆる「女性解放」のイメージと、治安の悪化で女性が暴力の対象となる、相反するイメージが広まった。また抗議する女性に処女検査を行うような嫌がらせも起きた。これらの現象をどのように捉え、論じるべきだろうか。

イスラーム世界の女性について歴史的視点から捉え直してみると、彼女らは長らく「語られる客体」でしかなかったことがわかる。イスラーム世界からの声が発せられるようになったのは、ポストモダン思想とポスト・コロニアル思想が結合し、エドワード・サイードなどヨーロッパのアラブに対する眼差しを批判的に指摘する論客が現れたことに端を発する。これらに触発されてイスラーム世界の女性たちが、客体化されたイメージへの異議申し立ての意味を込めて、自らの社会における女性の役割や位置づけについて論じ始めたのはようやく1980年代のことであった。

だが、9.11が起きると、イスラーム世界の女性は「野蛮な男たちに虐げられた救済されるべき存在」としてのイメージが強化される。ヨーロッパでは、ヴェールはイスラームにおける性差別の象徴、あるいは理解不能な他者の象徴として嫌悪・回避されるようになる。

「アラブの春」は、そのような潮流のなかで起きた。本書では、政変が起きたチュニジア、エジプト、政変が起きなかったサウジアラビア、モロッコ、バハレーンについて取り上げた。政変の有無に加えて、ジェンダーに関するそれぞれの状況は大きく異なっている。チュニジアでは1956年に複婚を禁止する画期的な家族法が成立し、フェミニズム運動も盛んに行われてきた。だが、「アラブの春」の発端となった露店商の青年の焼身自殺の原因が女性警官に殴られたことにあるとされると、女性警官は拘束され、激しいバッシングを受けた。エジプトでは「アラブの春」後、治安の悪化に伴ってレイプやセクシュアル・ハラスメントが顕在化した。女性活動家らは、女性への暴力防止のための活動を強化した。チュニジア・エジプトでは、新憲法においてそれぞれ男女平等が明記されたが、政変を経験しなかったモロッコおよびサウジアラビアでも、「アラブの春」を察知すると女性の地位改善は改革の焦点となった。政変は起きなかったものの反体制派による大規模なデモにより一時期非常事態が宣言されたバハレーンでは、女性たちがあえてヴェールを着用してデモ行進を行った。

いわゆる近代化論的思考では、社会が発展すれば男女の格差は取り除かれる方向へと向かう、とされる。イスラーム世界が女性にヴェールを「着用させ」続けているのは、「文明が未開」であり「野蛮」であることの象徴のように考えられる傾向がある。

しかし、イスラーム世界におけるヴェール着用者の増加は比較的新しい現象である。1980年代のイスラーム復興の潮流のなかでヴェール着用は流行した。教育レベルが向上し、女性が家庭外で就労するようになったことも、女性のヴェール着用を後押しした。ヴェールを着用していれば、女性たちは外出時にも身の安全を確保することができたのである。

「アラブの春」においても、ヴェールが積極的な意味と意義を持って着用される例が観察された。政情不安は女性に対する暴力を顕在化させる傾向にあるが、ヴェール着用には女性に対する暴力を防止する戦略的効果がある。

また、政変の有無にかかわらず、「アラブの春」に際して、女性の法的な地位や女性の政治参加は各政権の中心課題のひとつとなった。国際的な圧力もあり、女性の地位と権利はどの政権にとっても重要な政治問題である。

イスラーム世界では総じて女性の教育レベルは向上し、労働参加も促進された。女性たちは、治安の悪化にともなう性暴力の蔓延に悩みつつも、他方では、様々なレベルで戦略性を発揮している。「イスラーム国」のようなきわめて暴力的かつ性差別的な集団も出現しているが、女性たちは「救済されるべき」無力な存在などではないことが本書から明らかになるだろう。

（辻上奈美江）

（2）

近藤洋平（編）『中東の思想と社会を読み解く』東京：東京大学中東地域研究センター、2014年（ISBN978-4-906952-01-4）、非売品

東京大学中東地域研究センターおよびスルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座は、2012年度から公開セミナー「中東イスラーム世界セミナー」を開催しています。このセミナーは、中東・北アフリカ地域のみならず、南アジア、東南アジアなどイスラーム世界全体にかかわる特定のテーマをとりあげ、各分野の第一線で活躍する人を講師として招き、そのテーマについて深く探求することをその趣旨としています。2013年度は、「中東の思想と社会を読み解く」というテーマのもと、全11回の講義を開催し、中東・北アフリカ地域における社会・文化・思想の多様性およびその特質の一端を読み解きました。

本論集『中東の思想と社会を読み解く』は、この一連の成果をまとめたものです。論集の編成にあたっては、寄稿者からの各論考を、「イスラームの諸思想を読み解く」（第一部）、「ムスリム世界における少数派とその思想」（第二部）、そして「中東のキリスト教徒」（第三部）という3つの部に分類しています。収録された計10本の論文のタイトルと著者は、それぞれ以下の通りです。

第一部　イスラームの諸思想を読み解く

1. Early Embryos in Islamic Bioethics: A Comparative Study with Judaism and Christianity concerning Contraception, Abortion, and Embryonic Stem Cells（Kaoru AOYAGI／青柳かおる）
2. 現代エジプトにおけるイスラーム主義政治思想の動向―サイイド・クトゥブとムハンマド・クトゥブの著作の分析を中心として（西野正巳）
3. 「正統カリフ」概念の形成―スンナ派政治思想史の一断面として（橋爪烈）
4. イスラーム法学史再考（堀井聡江）
5. イブン・スィーナーとその後―研究史的展望（小林春夫）

第二部　ムスリム世界における少数派とその思想

6. 12イマーム・シーア派のハディース観（吉田京子）
7. 極端派（グラート）の伝統とアラウィー派（菊地達也）
8. イバード派イスラーム思想における罪の問題（近藤洋平）

第三部　中東のキリスト教徒

9. 東地中海世界における終末思想の展開（辻明日香）
10. ムスリム王朝支配下のエジプトにおけるコプト・キリスト教徒の参詣・巡礼（大稔哲也）

各論文の内容を順に簡単に紹介すると、青柳論文はイスラーム思想における初期胚に関する議論の特徴を、古典と現代のイスラーム思想との比較から、さらにそれらを現代キリスト教、およびユダヤ教思想とも比較することを通じ、明らかにしています。西野論文は現代イスラーム政治思想の形成と展開に大きな影響を与えている、サイイド・クトゥブおよびその弟ムハンマド・クトゥブの思想を読み解いています。続く橋爪論文は、預言者ムハンマドの後継者である、4名の正統カリフという概念がどのように形成されていったかについて、西暦12世紀までのスンナ派学者たちの著作を分析しています。また堀井論文は、欧米におけるイスラーム法の研究動向を回顧し、その問題点を指摘しつつ、法の近代化をイスラーム法学史の文脈で捉えなおすことの必要性を論じています。そして小林論文は、ここ20年における欧米諸国におけるイスラーム哲学研究の進展を確認しつつ、イブン・スィーナー後のイスラーム哲学の展開を、イブン・スィーナー、スフラワルディーそしてラーズィーの思想から考察しています。

第二部では、イスラーム世界の少数派の思想と活動が論じられています。吉田論文は、シーア派の一派である12イマーム派におけるハディース（伝承）観を論じつつ、西暦10世紀の12イマーム派の学者クライニーによるハディース集の重要性を明らかにしています。菊地論文は、シーア派から生じた集団である、グラート（極端派）やアラウィー派、またドゥルーズ派について、それらの集団がもつイマームの神格化や輪廻論、また宇宙論などの教説を分析しています。そして近藤論文は、同じくイスラーム世界の少数派である、イバード派による罪の議論を、主としてオマーンで活動する東方イバード派の著作から読み解いています。

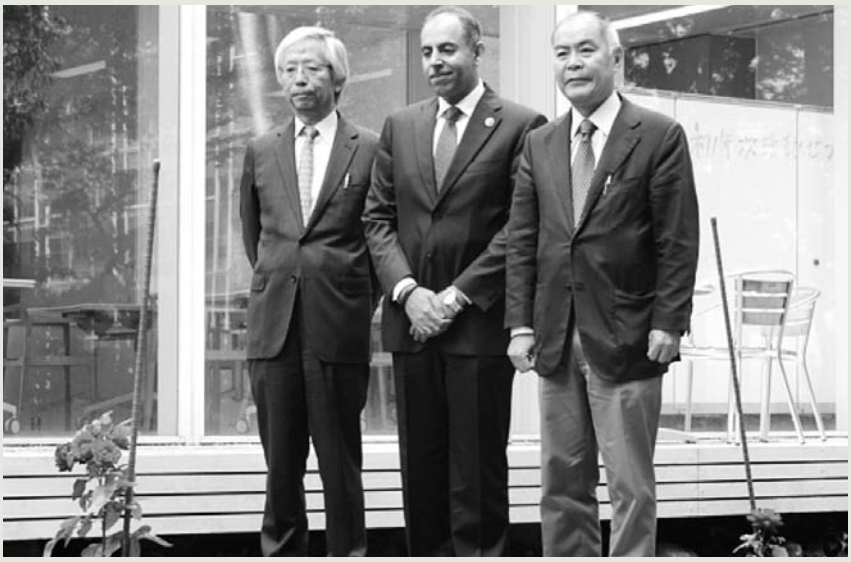
第三部に収められた論文のうち、辻論文は、東地中海における終末思想の展開を、アッバース朝期以降マムルーク朝期までに、キリスト教徒によって執筆された諸黙示録から考察しています。大稔論文は、ムスリム王朝支配下のエジプトにおけるコプト・キリスト教徒の参詣・巡礼の様子を、アラビア語で書かれた参詣書などから活写しています。

UTCMESは、入手を希望する方に本論集を無料で配付しています。詳しくは東京大学中東地域研究センターまでお問い合わせください。本論集の内容が、わが国と諸外国における中東・北アフリカ地域に関する研究の蓄積に貢献するとともに、同地域の研究に携わる、あるいは同地域に関心のある多くの方々の手元に届き、同地域の思想と社会をめぐるさらなる議論の呼び水となれば幸いです。

6. センターの活動から

（1）「スルタン・カブース・ローズ」の植樹

2014 年 5 月 23 日、ハーリド・アル＝ムスラヒ駐日オマーン国大使より「スルタン・カブース・ローズ」が寄贈されました。このバラの名前は、現在のオマーン国の元首である、カブース国王に因んでいます。スルタン・カブース・ローズ寄贈式には、ハーリド・アル＝ムスラヒ駐日オマーン国大使、長谷川壽一理事・副学長、石井洋二郎研究科長、田中純副研究科長らが出席しました。



（2）カタル大学総合文化学部長一行の東京大学教養学部来訪

2014 年 11 月 6 日、カタル大学のイーマーン・ムスタファウィ総合文化学部長一行が東京大学大学院総合文化研究科に来訪しました。石井洋二郎研究科長との会談では、2014 年 6 月に両学部・研究科の間で調印された、学術交流に関する協定内容の具体的な実施方法などについて意見が交わされました。同会談には、総合文化研究科から田中純副研究科長、高橋英海准教授、辻上奈美江特任准教授らが出席しました。

● UTCMES スタッフ紹介　（2015 年 3 月 31 日現在）

＜スタッフ＞

杉田　英明（センター長、兼務教授）
森元　誠二（客員教授）
辻上奈美江（特任准教授）
瀬口　美加（事務補佐員）
長澤　榮治（副センター長、兼務教授）
高橋　英海（兼務准教授）
近藤　洋平（特任助教）

＜ UTCMES 運営委員＞

杉田　英明（委員長、大学院総合文化研究科教授）
田中　　純（大学院総合文化研究科教授）
矢口　祐人（大学院総合文化研究科教授）
高橋　英海（大学院総合文化研究科准教授）
羽田　　正（東洋文化研究所教授）
長澤　榮治（東洋文化研究所教授）
菊地　達也（大学院人文社会系研究科准教授）

＜スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員＞

杉田　英明（委員長）
遠藤　泰生（大学院総合文化研究科教授、グローバル地域研究機構長）
矢口　祐人
田中　　純
松尾　基之（大学院総合文化研究科教授）
高橋　英海

●発行者情報　UTCMESニューズレターVol.6　平成27年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）
〒153-8902　東京都目黒区駒場3-8-1　TEL 03-5465-7724　FAX 03-5454-6441
http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/

印刷：JTB 印刷株式会社
〒140-0004　東京都品川区南品川 5-2-10　TEL 03-5715-0900　FAX 03-5715-0909